

はじまりのキリスト教会、初代教会にステファノという人が登場します。ステファノのこと、知っていますか、と聞くと、たいていの人が「ああ、あの最初に殉教した人ですね。」「むごい死に方をした人ですね。」という具合に、殉教した人、というイメージが強くて、あとは何も出てこない、ということが多い。しかし、それは言うまでもなく、あまりにも残念なことです。

ステファノははじまりのキリスト教会を駆け抜けていった人です。この使徒言行録において、登場し、逮捕され、説教を語った、と思ったら、殺されてしまった、神の御許へ瞬く間に帰っていった。しかし、この人のことを、わたしたちはもっと知りたい。知る必要があるのではないか、と思います。

ステファノのことは、これから何回かにわたってお話ししますが、7章に記録されている説教を読むと、非常に優れた資質の伝道者だったことがよくわかります。彼は、ギリシア語を話すユダヤ人であり、ユダヤ以外の地で育ち、かなり高度な、豊かな教育を受けた人だったと推測されます。そしてエルサレムに来て、律法について、また旧約聖書について、本格的に学んだ人だったのではないか。そしてエルサレムで伝道を始めていたキリスト教会の説教に触れ、イエス・キリストの存在を知り、キリストを信じる者とされた、そのような人であったのでないか。

ステファノについて、わたしたちが聖書から知ることができることは、ペトロやパウロに比べれば、ほんのわずか。しかしそれでも、彼が「霊と知恵に満ちた」人であり、「恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしをおこな」っている人だった、ということは知らされています。さらにステファノは、議論や論争のできる人だった。人々の前で、堂々と議論のできる人だった。そして聖書によれば、知恵と霊によって語る彼に誰も歯が立たなかった、ということです。

ステファノはパウロのように、手紙を書くこともなく、逝ってしまいました。もしステファノに、なお人生の時間が与えられ、パウロのような形で彼の書いたものが残されていたら...と思うほどに、ステファノは初代教会に与えられたすぐれたキリストの弟子のひとりだった、と思うのです。

初代教会には、先週も言いましたが、ヘブライ語を話すユダヤ人と、ギリシ

ア語を話すユダヤ人が共存していました。エルサレムの町は、世界の各地に住むユダヤ人、ディアスポラのユダヤ人と呼ばれた人々が、帰ってきたり、律法を学ぶために滞在したりする町でした。そのディアスポラのユダヤ人の中でエルサレムに来て、キリスト教会の福音に触れ、キリストを信じる者になるものが相当数出てきた。だから教会の中には、ヘブライ語を話すユダヤ人と、ギリシア語を話すユダヤ人、とがいたわけです。そして数は少ないのですが、ユダヤ人以外の外国人も共存していたのです。

ギリシア語は当時の世界のいわば共通語でしたから、ステファノたちの存在は、生まれたばかりの教会が、ユダヤ社会だけでなく、それ以外の世界に向けて福音を発信する、という意味で、とても大きな役割を担うことになっていきます。のちに使徒パウロが担っていった役割をステファノは最も早い段階で担っていったのです。しかも彼の宣べ伝えた福音は、きわめて意味深いもので、7章の彼の説教のところで、詳しく聞いていきますが、初代教会の一つの転機をつくっていった、といえるのです。

ステファノが福音を語る。力に満ちた、恵みに溢れた福音を大胆に語る者がいることによって、教会は前進する。わたしたちはなんとなく、そういうことをイメージしやすい。しかし、福音が正しく宣べ伝えられるところ、それだけでない。むしろ、それによってキリスト教会の中、内部でも、分離が起こってくる。福音と似て非なるものを信じていた人たちは、福音が語られることで、抵抗したり、抗ったり、そこで何らかのバトルが生じる。パウロが福音を語ることによって、ユダヤ教のしきたりの中で、何とか折り合いをつけていた人たちは、抵抗するのです。分離が起こってくる。事実パウロと他の使徒たちとの間でバトルは生まれてきたのです。

ステファノが福音を語る。それによってユダヤ教の人々の中から猛烈な攻撃が始まる。それは彼らの信仰の根幹が大きく揺さぶられるからです。

別にそれは特別なことではない。わたしたちも全くそうなのです。

福音が正しく語られる。もしそれが今まで自分が受けとめていたもの、自分が福音だと思って受けとめていたものと違っていれば、大きく揺さぶられる、激しく抵抗する。本能的に不安になるのです。不安になって、ステファノの言葉をさらに聞こうとする人もあれば、不安になってステファノの言葉を封じ込め、抑圧しようとする人もある。それはいろいろです。

しかしわたしたちが知っておかなくてはならないこと、それは福音が語られるところで、受容が起こり、信じて従うものも生まれると同時に、分離が起こ

り、抵抗が起こり、分裂が起こる、ということです。福音が正しく語られるところ、それは避けられない、ということです。

ステファノの福音宣教は、ユダヤ教の人々にとって無視することのできない、到底容認できるものではなく、バトルを呼び起こすものでした。そこで教唆、唆し、扇動、偽証人、といった手立てを次々に使ってステファノを逮捕し、最終的には殺す、ということにまでなっていくのです。

「わたしたちは、あの男がモーセと神を冒瀆する言葉を吐くのを聞いた。」さらに偽証人を立て、「この男は、この聖なる場所と律法をけなして、一向に止めようとしません。わたしたちは彼がこう言っているのを聞いています。『あのナザレの人イエスは、この場所を破壊し、モーセがわれわれに伝えた慣習を変えるだろう。』」

この発言からするとステファノを逮捕した人々の論点は二つ。神殿と律法です。この男は神殿をけなす、神殿を破壊する、と発言する。また、律法をけなす、つまり、「律法をまもり、これを守って生きようとする慣習を、どうでもいいことに変えてしまう、それがこのステファノの言っていることだ。これは神への冒瀆だ。」といているのです。わたしは、このステファノを攻撃する人たちの発言は、的を得ている、と思います。言い方は変ですが、ステファノの言葉にある面正確にとらえている。

ステファノを攻撃する人々は、偽証人を立て、偽証させる。しかし、これは聖書を読めばわかるように、実は偽証ではない。福音書には主イエスが「神殿を打倒し、三日あればたてることができる」といったのだ、と最高法院で偽証したものがいた、ということがどの福音書に出てきます。難しい話は今日は省きますが、主イエスは神殿に対して、まことの礼拝をする場所としてのご自分の身体、という意味でこういうことを言われたのです。神殿を打ち倒し、ご自分が十字架から三日後に甦ってまことの、神を礼拝する場になってくださった。その意味で主イエスこそが新たな、まことの神殿なのです。つまりステファノが神殿をけなした、と攻撃する人たちが言った、それは的を得た発言なのです。ステファノがどういう発言をしたのか、わかりませんが、彼は主イエスが語られたこと、まことの礼拝の場は、今あなた方が大事にしている神殿ではなく、わたしなのだ、ということ語ったのです。

同じように律法についても、ステファノは、律法をまもることによってではなく、イエス・キリストの十字架と復活によって生かされている自分を受けとめ、そこから歩みだすことこそ肝要なのだ、ということ語った。

だからこそ、相手側は、「この男は、この聖なる場所と律法をけなして一向に止めようとしません。」といったのです。

つまりステファノは、主イエスが語られたことを正しく受け止め、言うべきことを言うべき形で大胆に語った、ということです。特に、神殿と律法ということは、ヘブライ語を話すユダヤ人キリスト者にとっては、神殿で礼拝することも律法をまもることも相変わらず当たり前だと思っていたのですから、わかっていなかった。ペトロの説教では触れられていない事柄です。

一方、ステファノをはじめ、ギリシア語を話すユダヤ人キリスト者にとっては、神殿も律法も、生活の一部ではなく、そのまま鵜呑みに受け取るものではなかった。ステファノはイエス・キリストの福音において、神殿も律法も受け取りなおした。

つまりステファノはイエス・キリストが神殿と、律法に対して語っておられたことをそのまま引き継ぎ、それをいっそう明らかに語った。

ステファノのこのイエス・キリストの福音に立つ生き方、姿勢、それはあえて言えば、その後のキリスト者のライフスタイルを指し示すものとなったのです。神殿も律法も、大変複雑でデリケートで難しい問題。しかもユダヤ教と重なり合う部分でした。ペトロはそのことに気づいてもいなかったかもしれません。しかしステファノは、イエス・キリストの福音によって、自分の生活を見直すことができる人でした。考え直す、といってもいい。小さなことも大きなことも、自分が大事にしていることも、当たり前だと思っていることも、福音の中で、それをとらえなおし、一つの判断へと進み、それを臆することなく、語った。

それはキリスト者の生き方の一つの提示です。クリスチャンライフの提示です。福音によって生きるとはどういうことなのか、わたしたちはステファノから、そのことを受け取っていくのです。